九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語への自負と挫折 ： 台湾人作家の作品を通して

李, 郁蕙
東北大学高等教育開発推進センター ： 講師 ： 全学教育推進部語学教育室

https://doi.org/10.15017/18362

出版情報：言語文化論究. 25, pp.91-100, 2010-03. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

日本語への自負と挫折
――台湾人作家の作品を通して――

李　　郁　蕙

本稿は「日本語文学」への関心から出発した一連の研究の中に位置づけられるものである。「日本語文学」は日本の植民地統治の中から生まれ、書き手には日本人作家のほか植民地出身作家が多く含まれる。日本人作家にとってはあえて言うまでもないことかもしれないが、植民地出身作家にとっては日本語が表現手段としてもともとどういう意味合いを持つのだろうか。これについては、言語同化を強制された否応なしの選択肢以外に答えがあり得ないかと、これまでさまざまな角度から考察がなされてきた。

まず、最も直接的なのはインタビューなどで作家たちの生の証言を得るという方法である。本論の検討対象である台湾に焦点を当てると、荘紫蓉は、1997年から王昶雄（1916-2000）や、巫永福（1913-2008）、陳千武（1922-）たちを訪ね歩いてその声を記録した[1]。日本語の学習過程への言及が多く、作家たちの創作活動を裏付けるのに貴重な資料となっているが、執筆手段を日本語に選んだ背景についてはあまり触れられていない。当時台湾の言語環境を考えれば、それもやむを得ないと思われる。なぜなら、複数のエスニック・グループが存在する上、どのグループの言語も正書法が確立していなかったからだ。つまり、読み書きを含めて自由に駆使できる第一言語が学校教育で習得した日本語をおいては考えられない。にもかかわらず、そのことが戦後長い間「奴隷化」の証拠として道徳的な審判を突き付けられていただけに、心に傷を負ったまま筆を折り沈黙を守りぬいた作家もいた。このことへの反省もあって、「日本語文学」が再度脚光を浴びた二十世紀末に、日本語の問題性を不問に付す傾向が強くなったわけである。

けれども、母語で書くか日本語で書くかの二者択一は設問として成立しないとはいえ、日本語がいわゆるツールでしかないとは考えにくい。この点は、日本語教育の見地から行われた調査結果を参考にすれば明らかである。早期には甲斐ますみの「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」(1997)[2]が、直近には藤井彰二の「台湾『日本語世代』の日本語環境と日本語意識」（2006）[3]が挙げられるが、いずれも1910年代から1930年代前半に生まれた世代を対象とするものである。この世代は、戦前の日本語教育を経験し、日常のコミュニケーションに支障のない日本語能力を有する者が多い。老齢化する彼らは今や歴史の生き証人として重宝されているが、さらに注目を集めているのは彼らの語る日本観である。それは、おおむね肯定的な評価が多いことや、日本語使用に抵抗感を感じさせない特徴があるからだ。

作家に関する一次資料が乏しい中、同様に激動の時代を生き抜いた彼らから発せられる声は、間接的とはいえ、冒頭に掲げる問題の解明に役立つものと期待できる。しかしながら、調査する側も常に念を押しているように、鵜呑みにすることには留意すべきである。というのは、台湾では、戦後の国民党政権が「中国一元化」を強行したことへの反発により、戦前の日本統治に対する意識が変容したとされる。そのため、彼らの日本及び日本語に寄せる思いは、いわば、美化されすぎたノ

スタルジアというわけだ。

そこで、より還元的な答えがテクストの内部にあるのではないかとの発想に基づき、本稿に取り組んだ次第である。言語の問題を前面に出したものもあれば、行間に隠されたものもある。それらを丹念に読み取りながら日本語意識の有り様を明らかにしたい。その上、「日本語文学」の冠にある「日本語」の意味内容を探ることが目的である。

1　漢文の後退

まず、台湾を代表する日本語作家の一人、張文環（1909-1978）の「論語と鶏」（1941）という作品から始めよう。

> しかし何れにしても源はこの山の部落を降りて、町で公学校の帽子をかぶり、国語をべらべらとしゃべって田舎者をおどかしてやりたい。だから内地人が話しているのをそばできいてみると、その発音はク、ル、ス、カと云う四音だけが耳につくので、書房の子供達はいつも威張って見せるときは肩をいからせて、くるすかというのである。子供達はクルスカと云ってから台湾語でマッチを持って来いと云って威張ったものだ。
>
> 「クルスカマッチを持って来い。」
>
> 源は絵のついている本が読みたい。庭で公式に遊びたい。つまり遊んでもいいと認められた庭でさばきたい。歌を唄ってもいいという公認の前で声をはりあげたい。絵の具をつかっていろんなものが書きたい。そういうような学校の生活に入りたいと思うのである。書房の教育法はあまり味気ないからである。一日に四回先生が生徒の本に朱をつけて読ませることになっている[4]。

源という少年は伝統的な「書房」で学ぶが、「論語」の素読に終始する勉強に嫌気がさした。加えて「書房」の先生は迂闊そのものだ。神様に喧嘩の仲裁を乞おうと村民たちが鶏の首を切ったところ、その鶏を我先に持ち帰って御馳走にする。その光景を目の当たりにした源は、遊戯や唱歌の時間が盛りだくさんの「公学校」に憧れるばかりである。こうした大筋だけでも、作品の中にある鮮明な対立構図が看取される。片方は、題名に並べられた「論語」や「鶏」が皮肉った陳腐さや迷信ぶりである。もう片方は、「絵のついている本」や「絵の具」など西洋物によって暗示された先進性である。あるいは、対極の二項を旧式の「書房」と新式の「公学校」と読み替えることもできる。さらには、「書房」で教える漢文と「公学校」で教える「国語」＝日本語と見なすことも可能であろう。そして、源の気持ちがすでに傾いているように、前者は敗北を避けられないのだ。

清朝統治時代の台湾では、「書房」で漢文の薫陶を受け、それから「科挙」という官僚登用試験に進むことが知識人として立身出世するための基本ルートであった。読み方にこそ「河洛語」や「客家語」の差があるものの、共通の読み書き手段たる役割は漢文によって担われていた。ところが、日本統治時代に入ると、「科挙」への道が途絶えたこともあって、知識人を育成する教育機関の主役は「書房」から日本語同化を目的に設立された「公学校」へ移行することになった。在籍生徒数の増減で見れば、「公学校」は設立当初の1898年には二千五百人未満だったのが、新教育令改正の1920年初期には二十万人まで増加し、日中戦争勃発前の1935年には三十七万人に達していた。他方、「書房」は同年代順に三万人から六千人、さらに四千人へと大幅な減少に歯止めがかからなかった[5]。両者の消長に伴われてくるのは、言うまでもなく、リテラシーにおける漢文の独占的な地位が日本語に取って代わられることである。「論語と鶏」の子供たちが日本語っぽい音声を発して威張ろう

とする点からはもちろん、張文環の別の作品「頓悟」（1942年）からもその一端を垣間見ることができる。

> 私は父に出す手紙だけは漢文で書かなければならないので、骨が折れる。幸い公学校を出たとき、役場の給仕をつとめていながら、夜、父に論語を習ったりすることがあるのは隣近所の人に漢文の手紙を頼まれることがあるので、恥をかかぬためにと思っていたが、豈計らんやここで自分のために役立つとは意外でした[6]。

「公学校」を出た「私」は経済的理由で進学を断念し、台北にある呉服屋へ奉公することとなる。父から「論語」を教わっていたが、漢文で手紙を書くのは「骨が折れ」るという。一方、店番の暇つぶしに新聞を読むとしているが、そのことについては苦労したとの記述はない。「皇民奉公会」や「志願兵制度」などに触れた文脈から、時代背景が1941年前後と推測される[7]。新聞雑誌の漢文欄が禁じられたのは1937年日中戦争勃発以降であるため、すでに記事は日本語のみであったと察せられる。つまり、「私」は読み書きに際して漢文には違和感を覚えるが日本語なら問題なくこなせるというわけだ。「公学校」でも初めのうちは父兄の支持を得るために漢文を必修科目の中に取り入れていたけれども、時間数が少ない上に内容も漢籍の素読とはかけ離れていた。結局、日本語の常用を妨げるとの論調が高まるにつれ、随意科目を経て1937年に正式に廃止されることになった。「公学校」を出てから自宅でプライベートな学習を「私」がした背景はまさにここにあると思われる。そこで、「書房」の衰微のほか、公の教育現場から排除されたことがあいまって若い世代の間では漢文の馴染みが薄まりつつあった。しかも、手紙の代筆依頼に応えるだけということが象徴するように、もはや一昔の知識人のステータスシンボルとしてのみ名をとどめているのだ。

さらに張文環のもう一つの作品「地方生活」（1942）に目を通せば、漢文の後退ぶりが一層明白になる。

> 澤が本を読んでいるとき、婉仔がきて、澤の漢文教科書をとって、すらすら読むことがあるので澤は目を見張った。第一課の日出山上と云う所は婉仔にはあまりやさしくて、赤坊の本みたいだと偉そうな顔をして、澤を見返したりして威張った。しかし澤は婉仔のわからない国語教科書を早く読み出して、婉仔を羨ましがらせた[8]。

澤は東京に留学し、名前の読み方も「たく」という新世代のインテリの典型である。対して、許嫁の婉仔は「書房」へも「公学校」へも通わずに家で「論語」を学んだ古風の女性だ。上の引用は幼い二人が一緒に遊んだ場面で、その頃から澤は日本語、婉仔は漢文という慣れ親しんだ言語の分岐が早くも生じている。成人した後の澤は依然漢文が苦手で、婉仔宛の手紙で「汗をかいた」とされる。けれども、不思議なことに、二人はそうした違いからぶつかることなく、仲睦ましく結婚することになった。

このように、源と「私」と澤は三人揃って漢文から遠ざかっていく若者として設定されている。張文環本人の記述によると、「公学校」に入って日本語を勉強しはじめたのは十歳過ぎてからで、それまでは部落の「書房」で四書を勉強していたという[9]。そして、中学校以降は日本へ留学し、ますます漢文から疎遠になっていくという体験が、これらの主人公を生み出した素地になったと思われる。従来、張文環の作品といえば「大地に生きる農民」と「女性」[10]と二つのモチーフが注目されているが、ここで挙げた三つの例から帰納される言語観も見過ごせない。すなわち、漢文の理

解度を示す指標として入門書の「論語」が持ち出される点や、日本語と漢文が新旧を代表するものの、必ずしも強い拮抗関係にあるわけではないといった点である。

一方、張文環だけではなく、「公学校」教育が主体となった1920年代に育った日本語作家呂赫若（1914-1951）も同様な考えといえよう。代表作の「清秋」（1944）には耀勲という主人公が登場する。

「いやあ、子供の時分ですか。あの頃は漢学というと古い漬物のような気がしていやでした。しかし年をとるにつれて惜しいとも思ってくるのですね」。

そう言いながら、しかし、彼はあの頃ならば忙しい受験準備で余裕がなかったからだとも考えた。全く干乾らびた自分の勉強だったのに対して、祖父の昔の勉強を思うと、文秀才をとった位だから相当書物を読破したであろうことが想像されて、美しいものをよく見ようとするように彼は目を細めるのだった。しかしふと、彼は祖父との間に時代の大きな相違が横たわっているのを今更のようにひしひしと身に感じた。彼は改めて祖父の時代の家庭生活について考え、いつかきかされたことだが、曾祖父もまた読書人だったこと、祖父の科挙合格を曾祖父が非常に望んだこと、父の時代になると時勢はかわったが、それでも祖父は一人息子の父の立身出世を望んだにも拘らず中学を出るとすぐに学業を放棄した父のこと、自分達兄弟になるとがらりと変わって祖父までが医学方面にゆくことをすすめたことなど思いかえされ、時代の影響力というものに目を瞠るのだった。しかし、総じて自分の家庭というものが古くから学問に縁があったことを彼は嬉しく思った[11]。

東京の「医専」を卒業した耀勲は故郷に戻って開業の準備に取り掛かる。同居の祖父は「科挙」が行われた時代に「秀才」に合格し、漢文学に深い造詣を持つ。そのような祖父を彼は尊敬してやまないが、祖父もまた古い考え方に囚われず、彼に医学方面の道へ進ませる。漢文学から西洋科学への移行は、言い換えれば、主流言語が漢文から日本語へ転換したことを意味する。学問と言語と二つの意味において世代間に断絶が横たわるはずだが、大きな衝突を引き起こすどころか、「時代の影響力」ということでいともたやすく解消されている。呂赫若については、伝統的な家庭の題材や「反封建主義」的な作風が特徴との指摘は多いものの、言語をめぐる思惟については焦点から外れていると思われる[12]。耀勲一家に関する描写から、彼は漢文の式微に「惜しい」と感嘆する反面、逆らえぬ時代の潮流と受け入れる。裏返していえば、それに順応して日本語を使用するのは有識者ならではの知恵だということであろう。張文環にも共通したこの点は、日本語で表現すること自体が彼らに心理的な負荷をそれほど掛けなかったものと考えられよう。

２　日本語に対する自負

ところで、日本語を話すことについて真正面から切り込む作品といえば、周金波（1920-1996）の「志願兵」（1941）を忘れてはならない。物語の中心人物は八年前に東京から故郷に錦を飾った「私」である。義弟にあたる明貴も「私」のあとについて留学したが、激動の台湾情勢を肌で感じようと三年ぶりに帰省した。明貴には高進六という「公学校」時代の同窓が居り、こちらは卒業後すぐある「内地人の店」に勤務した。そこで「私」を感心させるほど「熟達した」日本語を覚えたけれども、近頃「日本精神」を練成すべく神社参拝に精進していることが今回の再会で分かった。それをめぐって高進六と言い争いになった明貴に対し、「私」は次のように注意した。

「それは悪いじゃないか、議論で友だちを捨てちゃつまらんじゃないか」

「いや捨てるじゃないんだ。ちょっと逃げただけさ。どうも話が合わぬのでネ。あいつは目かくしされた馬鹿みたいに盲目滅法に走りだすんだ。それが僕にはやりきれない。あいつは一途に日本人だ、大和心だという。てんで批判なんどしない。それが僕にはやりきれない」

「だって君だって日本人だ、日本人だって言っているじゃないか」

「そりや日本人にならなけれやいけないさ。しかし僕はあいつみたいに馬車馬になりたくないよ。何故日本人にならなければならぬか。それを僕は先ず考へるんだ。僕は日本に生れた。僕は日本の教育で大きくなった。僕は日本語以外に話しができない。僕は日本の仮名文字を使わなければ手紙が書けない。だから日本人にならなければ僕は生きたって仕様がないんだ。」[13]

明貴の反論は、要するに自分たちが日本人であることは確たる事実で、あえて「神がかり」的なことをする必要はないという趣旨である。根拠として「日本に生れた」ことや「日本の教育」を受けたこと、「日本語以外」はできないことが挙げられている中で、とりわけ三つ目が看過されてはならない。なぜなら、話しをするのも手紙を書くのも日本語でなければならないという言葉は、裏返して読めば、第一言語として最も得意とするのが母語ではなく日本語だという意味と取れるからである。前節で述べた主人公たちの場合、漢文に対する苦手感をあらわにすることで日本語への自負が逆説的に浮上するのだった。異なるアプローチからではあるが、どちらも日本語を使う時の安堵感をそれとなくアピールしていると見て取れよう。

もちろん、彼らのあまりにも類似した経歴から考えれば、そうした自負を共有するのも理解に難しくない。これまで触れてきた人物のうち、「志願兵」の明貴や「私」をはじめ、「地方生活」の澤、「清秋」の耀勲は皆留学経験を持つ。「公学校」以上の学歴がない高進六にしても「内地人」ばかりの職場で働くため、「頓悟」の「私」以外は全員日常的に日本語を使用する環境にいると思われる。それにしても、台湾人同士の間でも日本語でコミュニケーションを取ろうとするところが面白い。

「—明貴と同窓だったですか。ちっとも知らなかった。僕もT中出ですからお互いに先輩後輩ですな」

へんにうちとけた気持で私は彼に隣の席をすすめた。好感の持てる青年だった。

すると彼は困惑そうに、でもきっぱりと

「いいえ同窓といっても公学校時代のです。僕は高等科しか出ておりません」

「そうでしたか。あなたの国語があまりお上手なものだから僕はいままでそうだとばかり思っていましたよ」

これはお世辞ではなかった。しまった、とは私は思わなかった。彼と顔見知りになったのはまったく彼の熟達した国語の操作に一種魅力を感じたからだった。彼はまた親孝行として街の評判になっていた。彼の礼儀正しさに接したひとなら誰しも彼を中等学校以上の出だと独り決めするに違いないのだ[14]。

引用は明貴の帰省を出迎えるため、「私」と高進六が波止場に居合わせた場面である。何語で話していたかは明示されていないが、「私」がそれまでの返答を聞いて高進六の「国語」の上手さに敬服した点から、それは日本語ではないかと推測できる。「河洛」とか「客家」とかエスニックな出自が異なるという設定は特にされていない以上、同一であろう母語という選択肢もあり得る。にもかかわらず、二人は申し合わせることなく日本語で会話を切り出し、それで「私」が高進六を中学校の後輩か「内台結婚」の二代目と思い違うわけだ。そこまで日本語を話すことに執着せざるを

得ないのはなぜなのか。一番使いこなせるからという理由もあるが、おそらく日本語能力の如何が一定以上の学歴や出身背景を代弁しているからでもあろう。そこで、彼らは母語を通じて台湾人である意識を共有することよりも、いわば新興インテリ層への帰属感を確認することを優先したといえる。

3　母語との相克

さて、母語と日本語を使い分けなければならない葛藤がモチーフの作品として王昶雄の「奔流」(1943) がある。これも「私」という一人称的な視点のもとで、「内地人」妻の苗字に改姓した「本島人」伊東春生の生き様が語られている。

> 「なにしろ無理を押し過ぎた。痩せ我慢も病気にはかなわんかなあ」
> と伊東は笑いながら云った。顔の大らかな感じの割に、笑いの中には複雑な陰影や線が含んでいた。この人の意志の強さと、個性の尊厳を主張しているような勝気さを物語っているように思われた。職業はと訊いたら、この街はずれにある大東中学校の国文科教師だという。心なしか私の視線は、伊東の顔に注いだ。職業柄をいいことに、まるで観察でもするようにしげしげと見つめたものである。内地人であろうこの伊東は、そのアクセントからは察することが出来ないが、その顔の輪郭や骨組や眼鼻からして、どことなく本島人に私には見えたからである。植民地生れの神経過敏的な鋭い霊感といおうか、私は内地に居たとき、内地人は無論のこと、それが半島人であろうが、中国人であろうが、一目すれば例外なしに見当がつくのである。そしてこの私の鋭い霊感が麻痺していない以上、この場合の私の目の付けどころに狂いがないはずである。これが異常に私の好奇心をそそるのに十分であった。一刻も早く伊東の正体をつきとめたいし、この人と心ゆくばかりに語っても見たい衝動に駆られるのである。そして伊東が、私の予感通りに本島人であったほうが、私の興味が誘われ、希望が燃やされる素地の大いなることを感じたのである[15]。

まず、引用の中で注目すべき一点目は「私」が伊東の日本語のアクセントに言及しながら、「本島人」と思わしき顔立ちとのギャップを取り上げたことである。要するに、「私」にとって人の出身を区別するポイントは日本語か容貌になる。特に日本語は引用箇所だけではなく、たとえば伊東の実母か義母かを聞き分けるシーンでも常に機能しているわけだ。一方、「私」が伊東の正体を知りたいと思う気持ちの奥で彼との親交を望むということは、注目すべき二点目となる。「私」は三年前に東京から帰って亡き父の病院を継いだが、たわいない日々に煩悶していた。そこへ伊東が現れ、「私」に「心ゆくばかりに」語り合いたい衝動を与えた。彼となら「意気投合」でき、新しい「希望」を燃やすことができそうだからである。

以上の二点を総合すれば、「私」は「志願兵」の「私」と同じく日本語能力を目安に自分と他者の距離を図っていると考えられる。前述の場合「中等学校以上」の学歴が分界点とすれば、ここの場合「内地」化の度合いがそれに相当する。完璧な日本語のアクセントを身につけ、両親に対してさえも「本島語」を出さない姿勢から、伊東は着実に「内地」化を遂げている。そんな彼を見て「私」はかつての自分と重ね合わせずにいられない。というのは、留学時代の「私」は木村文六と名乗ったうえで出身を「四国か九州」と偽っていた。それを通し切れたのも、「郷土訛り丸出し」の台湾友人とは違って「私」が「べらぼうめ弁をぬか」すぐらい達者な日本語を操れるからだ。こうして日本かぶれの意味では伊東に勝るとも劣らない「私」だったが、伊東のように頑なに貫かない。片

言の日本語しか解せない相手にはきちんと母語に切り替えて接するし、「私」の母への挨拶を日本語で無理やり通した伊東の態度にも共感しかねる様子だった。しかし、それは故郷の現実とのやむなき妥協にすぎなかった。その証しは、伊東の秘密を知ってからも日本語で話し続けた点や、それで「知己」を得たような精神的な充足感を覚えた点などに表れている。つまり、「私」としては可能な限り日本語で話したい、また話せた時が最も自分らしくふるまえるものの、二重の言語生活との決別に踏み切れない。再び上京したい気持ちと一人身の母を思いやる気持ちが心の中で衝突しているように、日本語と母語とを取捨選択できないところに「私」の苦渋が込められているといっても過言ではないだろう。

もっとも、漢文はともかく、母語をも平然と切り捨てて日本語を選ぶキャラクターを多く造形したとして、作家に対する批判の声が強かった。とくに、明貴や伊東の例を見る限り、日本語を話すことは日本人としての同一性に直結するため、民族主義的な立場からは当然容認されるはずがなく、「皇民文学」とのラベルを貼り付けられていた。けれども、これまでにたくさんの先行研究者が読み直しを試みているように、抵抗か屈服かという二項対立的な議論をこれ以上に続けること自体に意味がないと思われる[16]。話し手として明貴や伊東を一歩離れたところから眺める「私」を例にすれば、二人とも日本語使用を堅持しているが、日本への帰属感を満たすためばかりとは言いがたい。「本島人」の仲間同士を選別する目的もあったからだ。ただし、「本島人」といってもわずか一部の集合で、日本語が堪能であることがその主なつながりである。この点から、日本語を話すこと（もしくは母語を話すこと）は、日本同化志向か台湾回帰志向かの二元性を超えた意味合い ── すなわち被支配層でありながら支配層に近い位置を得たという新興インテリ層の階級意識を醸成させる要素もなりえる ── と考えられる。そして、それが戦後に現れた新しい支配者の下で徐々に台湾人意識へ収斂していくことになる。そういう揺らぎと混沌の中でアイデンティティーが育まれてきた過程こそ、「日本語文学」ならではの真価としてもう一度見直されるべきではないだろうか。

4　同化の壁

以上のように、テクストの中で日本語を話すことがどう意味づけられているかを漢文と母語との二方向から照射してみた。改めて結論を繰り返すと、日本語が読み書きの手段としても日常のコミュニケーションの手段としても主要な登場人物から親しまれているということが明らかになった。ところが、テクストの外では次のような告白が聞かれる。

> 国語常用、というけれどお恥ずかしいながらも僕は即座に返答ができない。
>
> 心がけなければならないことであり、そして心がけてはいながら決して忠実とは公言できない。しかし僕は忠実になりたい一心である。忠実といっては語弊があるかもしれない。とにもかくにも国語でなければ僕は自己意思を表明することができない。だから言われるまでもない、国語常用は必死の問題でなければならない。ただ残念なのは普通談話の際に断片的に在来語が口辺にのぼることである。それが無意識の裡に出てくる、とは言い逃れはしないが馴染んだ言葉へのちょっとした感傷と老人たちの手前、そのような在来語が思い切って捨てられないのじゃないか。しかし一貫した自己意思の表明をするだんになれば、この時には堂々と羅列した国語をもってしなくては十分目的が達せられない[17]。

前述「志願兵」の作者周金波の随筆「囝仔（ギナ）の弁解」（1941）における冒頭である。「囝仔（ギナ）」とは台湾語で子供の意味で、日本人として未熟な自分を譬えたものと思われる。ここでは、周金波は明貴

のセリフどおりに日本語なしでは意思表明が難しいと述べながら、場合によっては母語の併用がやむを得ないものと主張する。上の世代とコミュニケーションする時や、「馴染んだ言葉へのちょっとした感傷」があるが故に母語でないとしっくりこない時がそれに当たる。周金波の本意は母語使用を擁護することではない。むしろ逆だ。体内の一部となっているだけに捨てたくても捨てられないという苦しみを訴えるためである。もっといえば、「不用意に洩らした一言」が「内地人の顰蹙」を買い、「国語常用」の信念不足を疑われることに対する反論ともいえる。その内容を敷衍すれば、日本語の自信とは裏腹に、完全には駆使できないという壁の存在を周金波がちゃんと認識していた。原因は、発音の難しさでもなければ文法の差異でもない。日本語より早くかつ自然に習得した母語の影響こそが最大の問題点であるとされるのだ。

これに共通した考え方をしているのは、陳火泉（1908-1999）という作家である。代表作の「道」（1943）では俳号青楠の台湾人技師を描き、独自の同化観を披瀝している。青楠は血統よりも言葉が「国民」の創出につながると信じ、日頃から俳句や短歌に励み、「日本精神の具有者」と自負している。だが、その自負は昇進の道が閉ざされたことによって傷つき、日本語使用の不徹底さを反省するようになる。

> 「何だって今まで、自分は最も大きな過ちを犯してきてることに気がつかなかったのか？国語で考え、国語で思うことすら、自分は本当にできてなかったじゃないか？国語で言い、国語で主張し、国語で書くことはできる、容易くできる。それはお互いにとって都合がいいからだ。しかし、一人でいるとき、それは勿論、主として国語で考え、国語で思うだろうが、けれども、ひょんなときに、国語でないー本島語で考え、思うことがしばしばなかったろうか。何かを心の中で数える場合、それを、ひ、ふ、み、と数えないで、一（チッ）、二（ヌウ）、三（サム）、と本島語で数えることがなかったか。しかも、最も大切な場合に、 ── それは自分の都合のいいように考える場合に ── 本島語で考え、本島語で思うことがなかったろうか。現に今〝多蝨不癢、多債不想〟そんな本島人的な思想を、本島語で考え本島語で思い出したじゃないか。しかも、そういったような思想によって諦観しようとさえする。なんて僕、安直な人間なんだろう！自分の今までの思想、それはすべて本島人的に、考えられた思想じゃなかったろうか。ああ、助からぬ。……」[18]

要するに、人と会話するときには「国語」を使うのが「容易」いことだが、「一人でいる」と特に「ひょんな」ときには「本島人的な思想」を「本島語で考え」ることがあるとして、彼は出身差別を受けても仕方ないと諦めたわけだ。抗議に立ち上がるよりもやり場のない憤怒を辛うじてこらえるというキャラクターの作り方は、屈服の証拠か面従腹背の作戦か議論の分かれるところなのかもしれないが、ここに陳火泉の一貫したスタンスを見ることができる。それは、すなわち、同化の問題を言語使用の側面から切り出し、要因として母語の干渉を取り上げるというものである。

これについては、もう一つの作品「張先生」（1943）とあわせてみればさらに明らかになる。主人公の張先生とは台湾出身の若い熱血教師で、言葉のしつけと歴史的共感を通じて児童を「国民」に養成するよう邁進する。同じ「公学校」に勤務する同僚たちは彼の懸命さに対して毀誉褒貶相半ばする。たとえば以下に登場する三人のうち、秘かに張先生に恋する鄭女教師はさておき、周訓導は「猫に小判」だと冷ややかである。対して、陳訓導は日本語の誤用に対する張先生の指摘や態度を大いに肯定する。

> 「しつけって、しつけって、……凡そ猫に小判というものですね。」
> この周訓導の自嘲的な言葉は鄭女教師の顔を曇らせた。

「いやいや、断じて行えば鬼神も三舎を避く。案外見どころがあると思うね。……いつだったか、忘れたがね、張先生が家に来た晩でした。始めての来訪だったもんだから、毎晩試験勉強に来ている児童（こども）を帰そうと思ってね。その時不用意にもね、台湾語的な表現を国語に翻訳してやったものだ。“さあ、みんな黙ってお帰りなさい”と言ってしまったんだ。お静かに、というべきところを黙って、と言ったんだからなあ。こどもが帰ってから、張先生に注意されたがね。感心したのは、その時の先生の態度でした。……」

自分の恥を臆面もなく陳訓導がさらけ出しているのを見ると、よほど張先生にべた惚れしているらしい。曇った鄭女教師の顔は今の告白で晴れやかになった[19]。

ところで、四、五十歳の陳訓導は一世代下の張先生には及ばないが、教鞭を執っていることから日本語の運用力が一定以上あると考えられる。それでも「不用意」だと「台湾語的な表現」を直訳してしまうという設定は、「道」の青楠が「ひょんな」ときに母語思考になってしまう状況と基本的に一致している。そして、前述した周金波の「無意識な裡」にポロリと出てくるという弁明の趣旨とも共通性が見て取れよう。つまり、日本語を話すことは彼らにとってとうてい自然な行為ではない。意識さえしていればつつがなくこなせるのだが、不意を突かれると脆くも崩れてしまう。その限界を思い知らされながらも、同化への夢を捨てきれない彼らの姿が痛ましい。

整理していえば、陳火泉も周金波も無防備な状態では母語モードへ自然に戻るため、言語上の完全なる同化がたちまち困難なものとなる。血統も欠けているうえに言葉の障壁も高い。そこでたどり着いた結論は、「道」の青楠と「志願兵」の高進六にそれぞれ志願従軍を選択させるように、日本のために戦うしかないという皮肉なものだ。一方、同じく日本語使用の問題に取り組んだ王昶雄は「奔流」で違うコンセプトを示している。「私」や伊東春生の例から、イントネーションを含めて完璧な切り替えが不可能ではないと比較的に楽観的なものとなっている。こうした多少の異同はあるものの、彼らが日本語に対して錯綜する思いを共有しているといえる。それは、時には新しい表現手段として占有できたことから生まれた高揚感であり、時には差別という自分の前に立ちはだかった厳然たる壁への憤慨である。これに、張文環や呂赫若に見られる、漢文の廃退を惜しみながらも日本語に対する抵抗感がないという受容の仕方を含めてみれば、表現手段の日本語に感じる台湾人作家の矛盾撞着が明らかになる。そしてそれが、「日本語文学」の「日本語」を切実で複雑な意味合いをもたらし、単純なツールとして軽視できるものではないといえよう。

注

1　十数名の作家にインタビューした内容は莊紫蓉『面對作家：台灣文學家訪談錄』全三集に集結され、2007年に吳三連台灣史料基金會より出版された。
2　甲斐ますみ「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」『日本語教育』93号、1997年７月。
3　藤井彰二「台湾『日本語世代』の日本語環境と日本語意識」国立国語研究所『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究　海外調査報告書』、2006年。
4　張文環「論語と鶏」『台湾文学』一巻二号、1941年９月。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第四巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。
5　『台湾の教育』（台湾総督府、1935）と鍾清漢『日本植民地下における台湾教育史』（多賀書店、1993年）の統計を参照。

6 張文環「頓悟」『台湾文学』二巻二号、1942年３月。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第四巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。
7 「皇民奉公会」は「大政翼賛会」に倣って「新体制運動」を担う組織として1941年に結成された。台湾人に対する「陸軍特別志願兵」制度は1941年６月に発表、1942年４月に実施された。
8 張文環「地方生活」『台湾文学』二巻四号、1942年10月。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第四巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。
9 張文環「茨の道は續く」『興南新聞』（台湾、台中県文化中心『張文環日本語作品及び草稿全編CD-ROM』所収）。
10 野間信幸「張文環の文学活動とその特徴」『関西大学中国文学会紀要』13号、1992年３月。
11 呂赫若「清秋」『清秋』（清水書店、1944年３月）。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第二巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。
12 陳映真等『呂赫若作品研究－台灣第一才子』（台湾、行政院文化建設委員會、1997年）を参照。
13 周金波「志願兵」『文芸台湾』二巻三号、1941年９月。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第五巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。
14 同前注。
15 王昶雄「奔流」『台湾文学』三巻三号、1943年７月。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第五巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。
16 周金波の「志願兵」に関しては、中島利郎「つくられた『皇民作家』周金波―遠景出版社『光復前台湾文学全集』をめぐって」（『台湾文学研究の現在』、緑蔭書房、1999年）を参照。王昶雄の「奔流」は垂水千恵『台湾の日本語文学』（五柳書院、1995年）や陳萬益「夢と現実―王昶雄「奔流」試論」（『よみがえる台湾文学』東方書店、1995年）などを参照。
17 周金波「囝仔（ギナ）の弁解」『文芸台湾』三巻一号、1941年10月。引用は『周金波日本語作品集』（緑蔭書房、1998年）に収録されたものを参照。
18 陳火泉「道」『文芸台湾』六巻三号、1943年７月。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第五巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。
19 陳火泉「張先生」『文芸台湾』六巻六号、1943年11月。引用は『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』第五巻（緑蔭書房、1999年）に復刻されたものを参照。